やさしい刑事

佐渡　譲

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

見るからに風采の上がらないヤボな中年刑事。名前も、年齢も、所属も、一切不明の彼にはある秘密があった。

それは『人に見えないものが見える事』…そんな「やさしい刑事」が織り成す幻想の世界を綴った物語です。

設定は完全なオリジナルですが、感性で例えるならば、漆原友紀先生の漫画『蟲師』に近いかも知れません。

殺伐としている現代社会に、一すじの暖かい光が差し込んで来る様なヒューマンドラマにしたいと思います。

目次

やさしい刑事　第1話　「蜃気楼の町」（1）　1
やさしい刑事　第1話　「蜃気楼の町」（2）　8
やさしい刑事　第2話　「少年と宇宙人」（1）　15
やさしい刑事　第2話　「少年と宇宙人」（2）　20
やさしい刑事　第2話　「少年と宇宙人」（3）　25
やさしい刑事　第3話　「目撃者」（1）　30
やさしい刑事　第3話　「目撃者」（2）　36
やさしい刑事　第3話　「目撃者」（3）　42
やさしい刑事　第4話　「母地蔵」（1）　48
やさしい刑事　第4話　「母地蔵」（2）　53
やさしい刑事　第4話　「母地蔵」（3）　58
やさしい刑事　第5話　「人形の涙」（1）　63
やさしい刑事　第5話　「人形の涙」（2）

やさしい刑事　第5話　「人形の涙」（3）　67
やさしい刑事　第5話　「人形の涙」（4）　70
やさしい刑事　第5話　「人形の涙」（5）　73
やさしい刑事　第5話　「人形の涙」（6）　76
79

やさしい刑事　第1話　「蜃気楼の町」（1）

しなびた漁師町の丘の上にポツンと立つ停留所にバスが停まった。
バスから降りて来た中年男は、上着のポケットからゴソゴソとタバコのケースを取り出した。
そうして物ぐさそうに、くしゃくしゃになったタバコに火をつけて吸った。
「ふぅ～う…」中年男はうまそうに煙を吐き出しながら、一息ついた。
バス停の下には、港町然としたU市の風景が広がっていた。それはどこにでもあるような田舎の漁師町だった。
「あんた。旅の人かね～?」
杖をつきながら近づいて来た人の良さそうな老人が、中年男に声を掛けた。
「えぇ、まぁ…」中年男はそう答えた。
「もしかして、蜃気楼を見に来なさったんかね?」
「蜃気楼…ですか?」
「あぁ、この町は沖に蜃気楼が出るんでな～…時々、よその人が見に来なさるんじゃわ」
「へぇ～…そりゃぁ、見てみたいですね～…せっかく来たんだから」

「見られるとええの～…たまにしか出ないからのぉ」
そう言うと、老人はとぼとぼと歩きながら、丘の向こうに去って行った。
見送った中年男は、タバコの吸殻を無造作に投げ捨てると、古びた旅行鞄を手に、町の方に下りて行った。
いかにも田舎町らしい、こじんまりしたU市の警察署…その署長室に若い刑事が入って来た。
「失礼します、署長。お呼び出しを受けてまいりました」
「あぁ、来たかね近松君。待っとったよ」
大きなお腹を大儀そうに持ち上げながら、署長は椅子から立ち上がった。
そうして、応接椅子に座っている風采の上がらない中年男を、若い刑事に紹介した。
「こちらは本庁から、例の広域事件の捜査に来られた刑事さんだ。土地に不案内だから、君が案内して差し上げてくれ」
「はい、了解いたしました。署長」近松はそう答えた。
「よろしくお願いいたします。近松刑事」中年男はいんぎんに腰を屈めて、近松にお辞儀をした
「いえ、こちらこそ。ええっと…」
「ヤマさんでいいですよ、いつもそう呼ばれてるので…早速ですが、聞き込みに回りたい

んだが」
「はい、いいですよ。車を取って来ますので、少しの間お待ち下さい」
そう言うと近松は一礼をして、車を出すために署長室を出た。
（本庁の刑事って、もっとキビキビして恐いのかと思ってたけど、普通のおっさんなんだなぁ～）
近松は何となく安心すると同時に、今会った中年刑事に何だか頼りなさを覚えた。
近松が車を警察署の玄関に横付けにすると、その刑事はゆっくりとドアを開けて、助手席に乗り込んで来た。
「お世話になります。近松刑事」刑事は、またいんぎんに礼を言った。
「いぇいぇ、ヤマさんも大変ですね～…こんな田舎まで出張捜査って…で、いつ頃まで？」
車を走らせながら、近松は助手席に座っている刑事に尋ねた。
「う～ん。捜査に先行きのメドが立つまでだねぇ…」
「そうですかぁ～…例の広域事件って、マルモク（目撃者）も手掛かりもないんですってね。この町に何か？」
近松がそう言うと、刑事は少しばかり困った顔になった。
「あっ！済みません。余計な詮索を…まだ捜査中でしたよね」

近松はしまったと思って謝った。捜査上の機密を聞くのはタブーだった。
「いや、いいんだ。しかし古い漁師町だねぇ、この町は…近松さんはここの生まれかね？」
刑事は若い近松に気を使ったのか、わざと話の方向をそらせた。
「はい、この町で生まれました。ここは何でも室町時代くらいから続いている漁師町だとか」
「沖には蜃気楼が出るそうだねぇ～」
「あぁ、よく観光ガイドなんかに載ってるやつでしょ。でもねぇ～…たまにしか出ないんで、見られたら運がいい方ですよ」
「そうか～…たまにしか見えないのか。で…見たことはあるのかい？」
「えぇ、地元ですからね～…この町の沖合いで、南から来る暖流と、北から来る寒流が交わるんですよ。気象条件によって、出たり、出なかったりするんですがね」
「ふ～ん、蜃気楼もお天等さましだいって訳か」
「そうそう、この町には古くから伝わる伝説があるんですよ」
「ほう～、そりゃあどんな？」
「昔々、親を失くした少年と、竜宮から流されて帰れなくなった人魚が、磯辺で出会ったそうです」

「何だかよくありそうな昔話だねぇ～」
「淋しかった二人は、磯辺で逢瀬を重ねる内に恋仲になるんですが、人間と人魚じゃあ一緒になりようがない」
「まぁ、陸に生きる人間と、海に生きる人魚じゃぁ、結婚はできないだろうなぁ」
「結ばれぬ恋をはかなんだ二人は、一緒に身投げしようとするんですが、どうしても二人一緒には死ねないんですよね」
「まぁ、そりゃ二人して海に身を投げても、相手の人魚は死ねないわなぁ…」
「それで二人はどうしたと思います」
「さぁて、どうしたのかなぁ～」
「少年は海に身を投げて死に、人魚は丘に身を投げて死んだ。つまり、二人は別々に死んだんですよ」
「う～ん、何だか可哀そうな話だねぇ…」
「蜃気楼は、最後まで一緒になれなかった二人のさまよえる魂が見せている幻だとか」
「近松さんはその伝説を信じているのかい？」
「まさか…子供の頃はよく親に聞かされて信じてましたが、もう大の大人ですからね～」
近松は苦笑いした。
「そうか～…でも、案外その話は本当かも知れないよ」刑事はそう言って微笑んだ。

ニ、三軒の聞き込みを終えて、港に差し掛かると、浜辺に人だかりができていた。
「あれぇ…事故でもあったのかなぁ～?地元の駐在が来てる」それを見た近松が言った。
「行ってみるかい」
「えぇ、よろしければ」
刑事と近松は、道路脇に車を止めて浜に下りて行った。
「お～い、土左衛門が上がったらしいぞ～!」
「吉行のやつが網に引っ掛けちまったってよぉ～」
漁師たちが口々にそんな事を言いながら、辺りから集まって来ていた。
人だかりの真ん中には、ブルーシートに覆われた…どうやら溺死体らしいものがあった。
「えらいもん引っ掛けちまったよ～!縁起でもねぇ…」
ブルーシートの側では、一人の若い漁師が何も手につかずに、おろおろしていた。
「駐在さん、見てくれよ～!二人とも手ぇつないだまんま離れねぇんだ」
困惑しきった若い漁師は、傍らにいる駐在に、何かを一生懸命訴えていた。
「ちょっと失礼」
刑事は人だかりをくぐって、覆われている溺死体にスタスタと近づき、いきなりブルーシートをめくった。

〜続く〜

やさしい刑事　第1話　「蜃気楼の町」（2）

「おい、おい、君い～！勝手な事をされちゃ困るなぁ」駐在はあわてて止めようとした。
「心配ない。U署の者だ」傍らにいた近松が、駐在に警察手帳を見せた。
「はっ！失礼いたしました」駐在は即座に敬礼をして引き下がった。
「若い土左衛門だなぁ…しかも、一人は日本人じゃぁない」溺死体をのぞき込みながら刑事が言った
「手をにぎったまんまで…こりゃぁ、心中ですかねぇ～？」近松は、刑事に尋ねた。
「う～ん…ホトケはまだ子供にしか見えない。そんな歳で心中するかねぇ～」
「ともかく、すぐに鑑識を呼びます。事件かも知れないし…」
「あぁ、そうした方がいいだろう」
近松は署に連絡するために、道路脇に停めてある車に引き返した。
刑事は胸の中に、何かしら奇妙なものが湧き上がって来るのを感じた。
U市の警察署に設けられた『心中事件捜査室』では、捜査官たちが死んだ二人の身元を洗っていた。
そこへ、やっと手掛かりをつかんだらしい渉外課の刑事が、資料を手に捜査室に入っ

て来て言った。
「ホトケの男の子の身元が割れました。鞍出隆宣。１０歳。島根県警に照会した所、叔父夫婦が殺人容疑で取調べ中です」
「じゃ、やっぱり殺人事件か!?」捜査官一同は色めき立った。
「いえ、隆宣君が失踪する一週間前に、姉が不自然な交通事故で死んでまして、叔父夫婦にその容疑が掛かっているようです」
「叔父夫婦だとぉ～!?それと、心中した男の子との間に、何で今回のヤマとの関係が…」捜査官が言った。
「それが叔父夫婦と言うのが食わせ者で、元々、資産家だった父親から、兄と分割して遺産を相続したんですが、自分の分は遊んで散財してしまい、金に困っていたようですね…実は三年前に、その兄夫婦も、死んだ姉と隆宣君を残して交通事故で亡くなってるんですよ」
「待てよっ！事故死した兄夫婦の遺産は、当然、死んだ姉と隆宣君が相続した…と言う事になるわな～」
「その通りです。兄夫婦の死後、隆宣君と死んだ姉は、叔父夫婦に引き取られたんですが、姉の交通事故死は、遺産目当ての偽装事故ではないか?と…島根県警では叔父夫婦を疑っているようです」

「じゃ、やっぱり隆宣君は、叔父夫婦に殺された可能性があるって事だなぁ」
「う～ん、部外者が捜査に口を出して申し訳ないが、違うんじゃないかなぁ～」
　議論に加わっていた近松の傍らで、じっと捜査官たちのやり取りを聞いていた刑事は、ぼそっと言った。
「そうですね～…確かに鑑識の結果では外傷はないし、毒物の痕跡も見当らなかった。二人とも」別の捜査官がそう断言した。
「そう言やぁ、外人の女の子の方の身元はどうなんだ?二人の接点がはっきりしない事には、どうにも捜査の進めようがない」
　焦りを募らせて来た捜査官たちは、渉外課の刑事を問い詰めた。
「多分、ロシア人だと思うんですが、取りあえずサハリン警察にでも行方不明者の照会をしてみるしかないです…時間が掛かりそうだなぁ」
　渉外課の刑事が困り果てた顔をしているところへ、おもむろに刑事が助け舟を出した。
「サハリン警察なら知り合いの警視がいるから、非公式に問い合わせる事はできるるよ」
「ヤマさん。サハリン警察に顔が利くんですか?」驚いた近松が、刑事に尋ねた。
「あぁ、だいぶん前に、ある国際事件の捜査で顔見知りになってね」刑事は事もなげに言った。

（ただのおっさんかと思っていたけど、この人はとんでもない人なんだ）近松は、さすがにそう思った。
「じゃぁ、お願いできますか？本庁にはなにとぞ内緒で…」渉外課の刑事はそう言って頭を下げた。
「ああ、いいだろう。聞いてみるよ」刑事はあっさりと承諾した。
　翌々日『心中事件捜査室』に入って来た刑事は、他の捜査官と一緒に詰めていた近松に言った。
「『有力な証拠をありがとう』って、お礼を言われたよ。サハリンの刑事が女の子の遺体確認に来るそうだ」
「サハリンでも何か事件があったんですか？」近松は尋ねた。
「女の子の名前はシレーナ・ドゥーシャ。１４歳。一週間前から行方が分からなくなっていたそうだ。現在、継母がサハリン警察に売春斡旋容疑で取り調べられている」
「何ですってっ!?」他の捜査官たちも、驚いて立ち上がった。
「シレーナの実の母親は去年亡くなった。父親は船乗りで、今の継母と再婚したんだが、この女が相当のワルで、売春組織に関係していたらしい」
「おぃおい、サハリンは花屋（売春）がらみかい…どうなってんだこのヤマ（事件）は？」
捜査官たちには訳が分からなくなった。

「父親が航海に出ている間に、シレーナを売春組織に売り飛ばそうとしたんだろうなぁ。それからシレーナは行方不明らしい」
「もしかして、嫌がったシレーナは継母に殺されたとか？」近松は刑事に聞いた。
「いや、違うな～…多分、いたたまれなくなっての自殺だろう」
「じゃ、二人の接点は？…メル友だったとか？フェイス・ブックで知り合ったとか？」
「いや、二人には接点などないね～…それに、シレーナにはロシアから出国した形跡が無い。仮に密かに国を出たとしても、わざわざＵ市までやって来て、見ず知らずの隆宣君と手をつないで一緒に死ぬ理由がないよ」
「そうですよねぇ～…でも、恋仲でもないのに、何で手をつなぎ合ってたのか？」
「たった一人の姉を失くした男の子。母を失い継母に裏切られた女の子…二人はバラバラに死んだ。それぞれ、別の場所で海に身投げしたんだ…んっ、待てよ！」
　刑事はしばらくの間、顔を上げて宙を見つめていた。何か思い当たる節があるようだった。
「近松さん。二人の遺体はどこに安置されているんだっけ？」やおら刑事は、近松に尋ねた。
「Ｕ市の漁協病院です。この町じゃ、遺体を安置できるのはそこだけなので…」
「すまんが、車を出してくれないか。もう一度、二人の遺体を確認したい」

「はい、了解しました」
刑事と近松は車に乗り込むと、U市の漁協病院に向かった。
刑事と近松は漁協病院の遺体安置室に着くと、離れ離れに安置されていた二人の遺体を検死台の上に並べた。
刑事は随分長い時間、二人の遺体を眺めていたが、ふと顔を上げて近松を見た。
「何か分かりましたか?」近松は刑事に尋ねた。
「遅くなるといかんから先に帰っていてくれないか。僕は後でタクシーでも拾って帰るから」
「はぁ、いいんですか~?…それじゃ、お先に」
すっかり焦れていた近松は、そう言うと、遺体安置室から出て行った。
二人の遺体をじっと見つめていた刑事は、おもむろに上着のポケットから手錠を取り出した。
「少年と人魚か……もう、絶対に離れるんじゃないぞ」
刑事はそう言いながら、死んでから海で出会って一緒になった『淋しい二人』の手を手錠でつないでやった。
それが、刑事にできるせめてものやさしさだった。
U市での聞き込み捜査を終えた刑事は、町の丘の上にある停留所でバスを待ってい

た。

そこへ、杖をつきながらひょこひょことやって来たあの老人が、刑事に声を掛けた。

「あぁ、旅のお人…蜃気楼は見られましたかなぁ～？」

「ええ、見る事ができました」

「そうか～…そりゃぁ来た甲斐があった」

「ええ、確かに…」

そう言いながら、刑事は老人にお辞儀をして、やって来たバスに乗り込んだ。

そして、刑事を乗せたバスは、蜃気楼の町から遠ざかって行った。

第一話　「蜃気楼の町」（完）

やさしい刑事　第2話　「少年と宇宙人」（1）

衛里病院の院長宅では、捜査官たちが緊張した面持ちで電話に張り付いていた。
昨日、院長の幼い長男が誘拐され、犯人から身代金を要求する電話が掛かって来ていたのだ。
「奥さん。お気持ちは分かりますが…もう少し落ち着いて下さい」
電話の前で、何も手につかずにおろおろしている院長の妻にヤマさんは言った。
「でも、信二の身に何かあったらと思うと…私、生きている心地がしなくって」
「大丈夫ですよ。犯人は金が目当てだ。金が手に入るまで、信二君には何もしませんよ」
「でも、そう言われても…」
「あぁ～、済みません。刑事さん…妻は去年、上の女の子を失くしたばっかりで」
衛里院長が、ひどく動揺している妻をかばうようにそう言った。
「あ、そうだったんですか～…そりゃぁ、失礼いたしました」
「とっても、弟思いのいい子だったんですけどね。去年、急性白血病で…あの時ほど、医者の無力さを感じた事はありませんでした」
そう言いながら、院長はサイドボードの上に飾られている写真に目をやった。

　そこには、大きなぬいぐるみを抱いた信二君と、亡くなった姉の杏子ちゃんが、仲良く並んで笑っている写真が飾られていた。
「そうとは知らずに申し訳ない。信二君は、たった一人残されたお子さんなんですね～」
「杏子は信二とは歳が離れてましてね。まるで自分の子供のように可愛がっていました」
「えぇ、よく分かりますよ。世話を焼きたくなるんでしょうね～。女の子は…信二君はぬいぐるみを抱いてますね」
「おと年の祭りの縁日でね。杏子が自分の小遣いで、信二にあのぬいぐるみを買ってやったんですよ。自分の欲しい物も買わずに」
「やさしい姉だったんですね～…ありゃぁ、何かの動物ですか?」
「いぇ、宇宙人です。信二は小さい頃から宇宙人が好きでね…『宇宙人はいる』って信じて疑わないんですよ」
「よく分かりますよ。子供は純粋ですからねぇ～」
「そんな純粋な弟が好きだったでしょうねぇ～。杏子は…あれから信二は、片時もぬいぐるみを手放しません」
「そうですか～。それはお気の毒でしたねぇ…」
「信二は最後の最後まで、杏子にしがみ付いて離れませんでした。『お姉ちゃん、死なな

いで！僕、ひとりぼっちになったら怖いよ～』って…」
「うん、うん。可哀そうにねぇ～」
「そしたらね。『大丈夫！信二が危なくなったら宇宙人に変身して助けるから…約束するよ』って…それが杏子の最後の言葉でした」
そう言うと、院長は顔を伏せて目頭を指で押さえた。
それからしばらくして、院長宅の居間に電話のベルが鳴り響いた。
院長の妻は、震える手で受話器を取り上げ、捜査官たちは傍聴器のスイッチを入れた。
受話器の向こうからは、犯人が身代金を要求する声が聞こえて来た。
「あっ！はい。お前一人でタクシーに乗って…はいっ！稲荷神社まで…５０００万円ですね。あの～…信二は無事なんですか？」
「ホシからの要求だな。発信源は特定できそうか？」
ヤマさんは電話を傍受していた平野刑事の耳元でささやいた。
「しっ！ヤマさん。ホシが電話口に信二君を出します」平野刑事がそれを制して言った。
「信二っ！大丈夫なの？怪我してない？…お母さん、すぐにお金を用意して行くからね」
院長の妻は、電話の向こう側にいる信二君に懸命に呼び掛けていた。
「切れました」平野刑事がそう言った。
「どうだ！発信源は探知できたか？」ヤマさんは尋ねた。

「こりゃあ、携帯電話じゃないですね～…ヤマさん。多分、公衆か何かから掛けて来てますよ」
「今どき公衆か～…手の込んだ事をするやつだな」
「取りあえず、ホシの要求に従うしかなさそうですね～」
「そうだな。だが、黙って従う手もない。こっちにも考えがあるさ」
そう言いながら、ヤマさんは顔を上げて宙を見つめた。
衛里病院の院長宅から、身代金の入った鞄を抱えて出て来たのは、婦警の大鳥刑事だった。
ホシが知能犯だと睨んだヤマさんは、院長の妻と背格好がよく似た婦人刑事とすり替えたのだった。
しかも、大鳥刑事にはどんな事態にも対応できるように、ＧＰＳ発信機の付いた携帯電話を持たせていた。
衛里院長の自宅前でタクシーに乗った大鳥刑事は、身代金の受け渡し場所である稲荷神社に向かった。
ヤマさんは、犯人に気づかれないように、充分な距離をとってタクシーを追跡した。
ところが、もう少しで稲荷神社に差し掛かると言う手前で、タクシーは突然方角を変えた。

ＧＰＳ発信機から送られて来るナビゲーターを見ていた主任刑事は、急いで大鳥刑事の携帯に電話を掛けた。

「どうした?･大鳥刑事。方角が違うぞ!」

「タクシー無線がジャックされました。ホシはＳ駅で、東行きのＴ線に乗れと指示しています」

～続く～

やさしい刑事　第２話　「少年と宇宙人」（２）

大鳥刑事の報告を聞いて、ヤマさんと一緒にタクシーを追跡していた平野刑事が言った。

「やはりか～…ホシは一筋縄ではいかないようですね」

「分かった。ホシの指示に従え。後は何とかする」ヤマさんは大鳥刑事にそう伝えた。

「ヤマさん。私らも電車に乗りましょうか？」と、平野刑事が尋ねてきた。

「いや、その必要はない。ホシの意図はだいたい分かった」と、ヤマさんは答えた。

「でも、電車の中で身代金の受け渡しをされたら…」

「いや、ホシは電車には乗っていない。逃げ場のない車内で金の受け渡しはせんだろう」

「じゃぁ？」

「東行きのＴ腺は、Ｃ駅で他社と相互乗り入れになる。そのために、Ｃ駅の手前で若干の信号待ちをするはずだ」

「あ！ホシはその隙を狙って、身代金を受け取ろうって寸法ですか？」

「所轄署に手配して、Ｃ駅の手前に張り込みを依頼しろ。すぐにだ！」

「了解しました。ヤマさん」

平野刑事は、即座に警察無線を使って、C駅を管轄する警察署に連絡を入れた。
ヤマさんの読み通り、大鳥刑事の乗った電車は、C駅の手前で信号待ちのために一時停車した。
「ホシからの電話です。電車のデッキから身代金を入れた鞄を投げろと」大鳥刑事がそう報告して来た。
「言う通りにしろ。もう所轄署の刑事を張り込ませてある」ヤマさんは、大鳥刑事に指示した。
「はい」大鳥刑事は電車のデッキに出て、鞄を線路脇の田んぼに投げた。
「来ましたね～…ヤマさん。ぴったりの勘です！どうしてそんなに勘が働くんですか？」
「まぁな…それは内緒だ」ヤマさんはそう言ってとぼけた
ヤマさんは平野刑事と共に、大鳥刑事が身代金の入った鞄を投げた現場へと車を走らせた。
ところが郊外の外れの田舎道で、前の方からやって来たタクシーとすれ違った。
タクシーはかなりスピードを上げて飛ばしていたので、車を路肩に避けなければならなかった。
「随分、乱暴な運転をするやつだなぁ～」平野刑事が怒ったように言った

「ん…今のタクシーなぁ～」少し小首を傾げながら、ヤマさんは言った。
「はぁ…タクシーがどうかしましたか？」
「いや、何でもない。俺の勘違いのようだ」
ヤマさんにはピンとくるものがあったが、平野刑事にはそう言ってはぐらかした。
ヤマさんと平野刑事が現場に着くと、どうやら所轄署の刑事がすでに容疑者を逮捕したらしく、報告にやって来た。
「あぁ、本庁の刑事さん。ご苦労様です。たった今犯人を検挙しました」
見ると、一人の農夫らしい男が手錠を掛けられたまま、懸命に刑事たちに無実を訴えている。
「俺は誘拐犯じゃないってば～！田んぼを見に来たら鞄が置いてあったから、それで…」
どうやら張り込んでいた刑事たちは、完全に人違いの人物を捕まえたらしかった。
さすがに勘の鋭いヤマさんも、土壇場の番狂わせまでは読む事ができなかった。
多分、犯人は張り込んでいた所轄所の刑事に農夫が逮捕されたのを見て、あわてて逃げ出したのだろう。
身の危険を感じたのか？それっきり犯人からの音信は途絶えた。
誘拐事件の場合、時間が経てば経つほど、人質の命は危険になる。『信二君誘拐事件捜査班』の焦りは募った。

ところが、信二君誘拐事件は意外な急展開を見せた。
港町付近を巡回パトロールしていた巡査から、目撃情報が入ったのだ。
「目撃情報が入りました。港町付近で、ぬいぐるみを抱いた子供連れの男を見掛けたと…」
「何っ！それは本当か？」
八方ふさがりになっていた捜査班は、その報告を受けて色めき立った。
「それが、職務質問しようとしたらしいんですが、旧倉庫街付近で見失ったと…」
「よしっ！みんな行くぞ～」ヤマさんの指示が、捜査室に詰めていた捜査官たちに飛んだ。
応援の警官も含め、捜査班は全員でパトカーに分乗して、港町に向かった。
港町は新旧二つに分かれ、小さな方の旧港には、古い倉庫が立ち並んでいる。
新しい大きな港ができてから、この小さな港の倉庫は、あまり使われなくなっているらしかった。
「目撃情報があったのはこの辺りですね～」目撃報告を受けた刑事が言った。
「手分けして探せ。特にタクシーを見掛けたら、すぐに俺に連絡しろ！」
ヤマさんが全員にそう指示すると、平野刑事が怪訝そうに尋ねて来た。
「タクシーですかぁ～？」

「地理に詳しくって、電車の運行状況にも通じ、タクシー無線をジャックする知識がある、そんな職業は何だ?」
「あっ!タクシー業界の関係者…なるほどぉ」
ヤマさんにそう言われて、平野刑事はようやく納得した。
～続く～

やさしい刑事　第2話　「少年と宇宙人」（3）

捜査官たちと応援の警察官は、全員でしらみつぶしに旧倉庫街を捜索した。
しばらく経ってから、ヤマさんの警察無線には、捜査官からの報告が入って来た。
「倉庫の側でタクシーを見つけました！傍に信二君がいました！ぬいぐるみを抱いて…今、無事保護しました」
「そうか、信二君が無事で良かった～…で、ホシは？」
「それがえらい事になっています。すぐに来て下さい」
ヤマさんと平野刑事は、ただちに信二君が保護された倉庫の前に駆けつけた。
子供がやっと通れるほど開いた倉庫の鉄の扉の向こうからは、男のわめき声が聞こえていた。
ヤマさんは倉庫の扉を開けようとしたが、重い鉄の扉はピクリとも動かなかった。
「みんな手を貸せっ！しっかし、重いなぁ～…この扉」
刑事たちが開けようとしている扉に掛かっていたはずの錠は、バールで捻じ曲げられたように歪んでいた。
「錠が捻じ曲げられてますねぇ～…何かものすごい力で捻ったみたいだ」平野刑事が

言った。
やっとの思いで鉄の扉を開けて倉庫の中に入った捜査官たちは、目の前に信じられない光景を見た。
「なんじゃ！ありゃぁ～？」
倉庫の中に入った刑事たちは、あっけに取られたまま上を見上げた。
「バッ・ケッ・モッ・ノッ・ガァ～！ばけものがぁ～！…助けてくれ～ぇ！」
一人の男が、天井からクレーンに吊るされて、手足をバタつかせながら、何やら訳の分からない事を喚いていたのだ。
「あぁ、大人しく逮捕されりゃぁ～、助けてやるよ」ヤマさんは、吊るされている男に言った。
「分かった、分かった。何でも言う事を聞くから、早く降ろしてくれぇ～！」
すっかり何かに怯えきってしまっていた誘拐犯は、こうして無抵抗のまま逮捕された。
母親に連れられ、ぬいぐるみを抱いて警察署にやって来た信二君に、刑事たちは手を焼いていた。
今回の誘拐事件の事情聴取が、一向に進みそうもなかったからだ。
「ねぇ、信二君…誰が君を倉庫の中から助けてくれたのかな？」事情聴取担当の刑事が尋

ねた。
「宇宙人だよ」信二君は、事もなげに答えた。
「鉄の錠を壊したのも？重い扉を開けてくれたのも？」
「そうだよ。全部宇宙人がしてくれたんだよ」
「じゃ、閉じ込められていた君を助けてくれたのは宇宙人なのかな？犯人の他に人はいなかったのかな？」
「だから、宇宙人だってばぁ～…宇宙人が僕を助けてくれたんだよ」
　担当刑事と信二君のやり取りを聞いていた平野刑事は、部屋に入って来たヤマさんに言った。
「さっきから、ず～っとあの調子なんですよ。ヤマさん」
「あの調子って…何をシケタ面してんだよ、平野刑事」
「だって、子供に鉄の錠が曲げられますか？重い倉庫の扉を開けられますか？絶対に誰かがいたに違いない！」
　小さな子供が、どうやって頑丈な倉庫の錠を壊して、外に逃げられたのか？
　どうして、犯人がクレーンで宙吊りになっていたのか？…捜査官たちは誰もが首をひねっていた。
　ヤマさんはニコニコしながら少年の傍らに行って、彼の目線と同じ高さにしゃがみこ

んだ。
　少年は、自分の言う事を分かってもらおうと、一生懸命にヤマさんに訴えた。
「宇宙人が助けてくれたんだ。ねぇ、おじさん。宇宙人はいるんだよ…本当だよ」
「あぁ…宇宙人はいるよ。君を助けてくれたんだから…」
　そう言ってヤマさんは、少年が抱いていた宇宙人のぬいぐるみの頭をなでてやった。
　それから心の中でこうつぶやいた。（ちゃんと約束を守ったんだよな…お姉ちゃん）
　どうせ、誰にも事の真相は理解できないだろう…ならいっそ、本当の事は言わない方がいい。
　それが刑事にできる　せめてもの『やさしさ』だった。
「ヤマさん。どうやって調書をまとめりゃいんですか～?」
　平野刑事が、困り果てたような顔をしてヤマさんに聞いて来た。
「信二君の言った通りに書いときゃいいだろ」ヤマさんはそっけなく言った。
「宇宙人が誘拐犯をやっつけて、子供を救出したって…ですか?」
「ありのままの事実を、ありのままに明らかにするのが刑事の仕事だろ」
「そんな～、上に怒鳴られますよ～…お前、ふざけてるのかって」
「なら、お前さんが助けた事にすりゃぁいい。そうすりゃ、警視総監賞ものだな…出世できるぞ～、平野刑事」

そう言うとヤマさんは、情けない顔をして突っ立ている平野刑事を残して、笑いながら部屋を出て行った。

「ちょっと、ちょっと、ヤマさんってば～…もう～」

困り果てた平野刑事の声が、その後を追いかけて来た。

平野刑事に知らん振りをして、警察署の庭に出たヤマさんは、上着のポケットからゴソゴソとタバコを取り出した。

そして、くしゃくしゃになったタバコに火をつけて、うまそうに一服吸った。

（大人には世界の半分も真実が見えちゃぁいない。純粋な子供には全部が見えているんだろうな～）

そうつぶやきながらヤマさんが見上げた空には、ぽっかりと白い雲が浮かんでいた。

やさしい刑事　第二話　「少年と宇宙人」（完）

やさしい刑事　第３話　「目撃者」（１）

「通報が入りました！Ｔ町の住宅街にある家の二階で老婆のマンジュウ（遺体）。発見時刻は午後５時２０分。第一発見者は隣家の奥さん…どうやらコロシ（殺人事件）のようです」

　飛び込んできた刑事の報告に、帰り支度に取り掛かっていたヤマさんは、いったん天を仰いでから振り向いた。

「やっぱりな～…何だか今日は真っ直ぐに帰れそうもない予感がしていたよ」

　そうして、すぐさま上着を着直すと、デカ部屋に詰めていた捜査官たちに号令を掛けた。

「出るぞっ！平野刑事。工藤刑事。浜崎も付いて来い！」

「はいっ！了解しました」平野刑事以下、デカ部屋に詰めていた刑事たちが答えた。

　刑事たちは直ちに二台のパトカーに分乗して、現場の警備に当る警官たちと共に警察署を出た。

　春先の夕暮れの空はどんよりと曇って、今にも泣き出しそうな気配だった。

「昨日は天気が良かったのに、今日は降りそうだなぁ～…面倒なヤマ（事件）じゃなきゃ

いいが」ヤマさんはそう呟いた。
「そうですね。降られると何かと捜査の邪魔になりますからねぇ～…イヌの応援も頼めないし」平野刑事も言った。
「まぁ、面倒にならない事を祈るしかないか」
「きっと大丈夫ですよ。ヤマさんの勘はイヌより鋭いから」
「おい、おい、俺はイヌ扱いか～…平野刑事」
「いや、そう言う意味じゃぁないですよ。頼りにしてます…って事です」
「下げてみたり、持ち上げたり、ひどいやつだなぁ～、お前さんは」
そんな話をしながら、刑事と警官たちが事件現場に到着した時は、午後５時３０分を回っていた。
事件現場に着いた刑事たちは、早速、第一発見者の立会いの下に、死体の検分を行った。
外傷がないところを見ると、死んだ老婆は、どうやら首を絞められて殺されたようだった。
ヤマさんは、現場検証に立ち会ってもらった第一発見者の隣家の奥さんを早々に帰宅させた。
事件には直接関りが無いと判断して「聞きたい事ができたら、こちらから出向きます

から」と伝えておいた。
旦那さんも帰宅する頃だし、夕飯の支度もあるだろう…と、やさしいヤマさんは気を使ったのだった。
ほどなく鑑識捜査班が到着し、二階の老婆殺害現場の仏間にカメラのフラッシュがまたたいた。
鑑識捜査官は、白いチョークで遺体に沿って白線を引き、入念に殺された老婆の身体を調べた。
「やはり死因は絞殺か？」ヤマさんは鑑識捜査官に尋ねた。
「そう見て間違いないですね。縊死痕から推測すると、死後２０時間前後って所ですね」
「そうか～…昨夜の犯行だとすると、ゲンニン（現場確認）に立ち会ってもらった隣の奥さんのゲン（証言）とも一致するな」
「部屋が荒らされてないと言う事は、やはり顔見知りの怨恨絡みでしょうか？…仏壇の中の現金や通帳もそのままだし」
一緒に捜査に加わっていた平野刑事がそう聞いて来た。
「まぁ、そのセンもあるわなぁ…にしても、ホシ（犯人）は余程あわててズラかったらしいな」
「誰かにメ（目撃）でも付けられたんでしょうかねぇ～？ヤマさん」

「う～ん…しかし、ホトケの婆さんは一人暮らしだったそうだしな。誰か別の人間がいたとは考えにくい」
「犯行時刻に別の誰かが訪ねて来た…とかは、ないですかねえ?」
「だったら即通報があるだろう…平野刑事、後を頼むわ。ちょっと隣の奥さんにもう一辺ウラ（証言）を取って来る」
「はいっ！了解しました。ヤマさん」
　そう言ってヤマさんは、一階まで降りて玄関の戸を開けた。外には事件を嗅ぎつけた野次馬が、パラパラと集まって来ていた。
「ご苦労様です」事件現場の警備に当っていた警官が、ヤマさんに敬礼をした。
「あぁ、ヤマ（事件）を嗅ぎつけたブンヤ（記者）たちがわんさか寄って来なきゃいいがな～…しっかり頼むぞ」
　警官を激励したヤマさんは隣の家に向かった。隣家と事件があった家との間には、壁を挟んで７０ｃｍほどの狭い隙間があった。
　ヤマさんは、近代建築で作られた「蔦矢」と言う表札の出ている家の前に立って、玄関のドアホンを押した。
「は～い、どちら様でしょうか?」ドアホンの向こうから奥さんの声が聞こえて来た。
「すみません。先ほどは現場検証に立ち会っていただいてありがとうございました」

「あぁ、警察の方ですか。ただいま開けます」
玄関のドアがガチャリと開いて、品の良さそうな中年女性が顔を出した。
「あっ、さっきの刑事さんでしたか。どうも失礼いたしました」
「いぇいぇ、こちらこそお忙しい所をお手間を取らせまして、心より感謝いたします」
「あれから何か分かりましたか？」
「いぇ…その件でもう少し詳しいお話をお伺いしたいと思いまして」
「外が騒がしくなってるようだし、玄関で立ち話をしてると人が寄って来るといけない。上がってもらいなさい」
その時、ダイニングルームの方から、そう言っている旦那さんの声が聞こえて来た。
「そうですわね…どうぞ、お上がり下さい。刑事さん」
「お忙しい所をすみません。それじゃぁ失礼させていただきます」
ヤマさんが、奥さんに案内されてダイニングルームに入ると、眼鏡を掛けた恰幅のいい旦那さんが迎えてくれた。
ダイニングルームの壁や飾り棚には、たくさんの表彰状やトロフィが飾ってあった。
「いやぁ、私達もびっくりしてるんですよ。まさか、あのお婆ちゃんが…って」その旦那さんが言った。
「えぇ、私も見た時は血の気が引きました。何が何だか分からなくって」奥さんがそう言

葉を継いだ。
「いや、さぞ驚かれた事でしょう。ご通報いただき感謝いたします」ヤマさんはそう言って頭を下げた。
「いぇね、お婆ちゃんは去年旦那さんを亡くされて一人暮らしだったもんで、家内が時折様子を見に行ってあげてまして」
「足がお悪いのに、いつも二階の仏間にいるから『下でお休みになったら』って言っても、亡くなったお爺ちゃんの側に居たいって言われてね」
「そうだったんですかぁ～…何だかお婆ちゃんの気持ちは分かるような気がします」
「今日、主人を送り出した時も、夕方のお買い物に行った時も、玄関が開けっ放しだったんで、もしや！と思って上がったら」

～続く～

やさしい刑事　第３話　「目撃者」（２）

「いいお婆ちゃんだったのにねぇ…まさかあんな事になるとは」旦那さんが、信じられないと言う顔をしながら言った。
「何か、ここ数日変わった事は無かったですか？様子が変だった？とか、誰かに脅されてるみたいだった？とか」
　ヤマさんがそう尋ねると、奥さんが答えて言った。
「いぇ、特に変な様子は無かったですが…あぁ、そうそう。甥子さんとか言う方が「金の無心に来る」と愚痴をこぼしてましたねぇ」
「甥ねぇ～…昨日の夜、隣から何か異常な物音とか、悲鳴とかは聞こえませんでしたか？」
「う～ん…このダイニングからでは、隣の二階の物音は聞こえませんねぇ…あぁ、そうそう弓子なら」と旦那さんが言った。
「弓子さん…ご家族の方ですか？」
「えぇ、二階にいる下の娘です。上のはもう遠くの大学に行ってましてね。おい、お前。ちょっと弓子を呼んできなさい」

「はい、あなた」

旦那さんにそう言われた奥さんは、ダイニングルームの横にある階段から二階に上がって行った。

しばらくして、16歳くらいの少女が母親に手を取られながら階段を下りてきた。少女は右手に白い杖を携えていた。

その白い杖の少女は、キョトキョトしながらおぼつかない足取りで歩いてきて、母親に引いてもらった椅子に腰掛けた。

「娘の弓子です。ご覧の通り生まれつき目が見えないもんで」旦那さんが、そう言って少女を紹介した。

「あぁ、それはご無理を申し上げました…ごめんね弓子ちゃん」

ヤマさんがそう言うと、少女は声のする方を探るように顔を向けて、ニコッと笑った。

「弓子。昨日の晩、お隣で何か変な物音がしなかったかい？警察の方が来られて尋ねられているんだが」

父親にそう尋ねられた少女は、人の気配を探すようにヤマさんの方に向きながら言った。

「あのね…昨夜バイオリンの練習をしようと思ってベランダに出たら、お隣で怒鳴り声がしたので、恐くなって部屋に戻ったの」

「ベランダに出てバイオリンの練習？…その時に怒鳴り声がしたんですか」
「弓子はバイオリンをやってるんですよ、刑事さん。まぁ、目が見えないので友達もできないし、不憫に思って幼い頃からバイオリンを習わせてましてね」
「あぁ…それで表彰状やトロフィがあるんですね」
　ヤマさんは、ダイニングルームの壁や棚に飾ってあるたくさんの表彰状やトロフィに納得した。
「親が言うのも変ですが、才能があったのか？お陰様で小学生の頃から、あちこちのコンクールや大会で賞をいただきましてね」
「そうですか。それはすごいですね～…それでベランダで練習を？」
「はい、隣近所の迷惑になるといけないから、夜遅くまではやっていないんですけどね」
「ご迷惑じゃないですか？ってお婆ちゃんに聞いたら『いや～、いい音色だねぇ…心が癒されるよ』って喜んで下さってたのにねぇ」奥さんも付け加えて言った。
「そうですかぁ～…いや、手掛かりをありがとう、弓子ちゃん。お陰で助かりました」
　主任刑事がそう言うと、少女はまた声のする方を向いて、ニコッと笑った。
　それから、少女は椅子から立ち上がって、母親に支えてもらって階段を上がって行った。
「どうも、お忙しい所に押し掛けてお邪魔いたしました」

ヤマさんはそう言って旦那さんにお辞儀をして、小雨の降りしきる中蔦矢家を後にした。

ヤマさんが得た情報から、殺害された老婆の甥をマルヒ（容疑者）と見た捜査班は、甥の立ち回り先を洗う事にした。

刑事たちは方々に散ってゆき、ヤマさんも、甥の勤め先である町工場の庭先まで聞き込みにやって来た。

「うん、あの野郎ね…一週間も無断欠勤しやがって！首にしてやろうと思っていたところですがね」町工場の社長は言った。

「誰か、普段の様子をよく知っている親しい同僚はいませんでしたか？」

「そうだねぇ～…あぁそうだ！お～い溝渕。ちょっと機械を止めてこっちへ来い」

社長は工場の方に向かって、大きな声で誰かを呼んだ。

「はぁ…おやっさん。何ですか～？」

油で汚れた手をタオルで拭きながら、３０すぎの若い工員が工場の中から出てきた。

「警察の方が来られててな…弦巻の事を聞きたいっておっしゃってる」社長が工員に言った。

「どうも…何かあったんスか？」工員はヤマさんにあいさつをすると、訝しげな顔をした。

「知ってる事があったら、何でも話してあげるんだぞ」社長は工員に言った。
「知ってるも何も、こないだあいつに2万円貸したまんまなんですよ～…競馬でスって金がないって言うから」
「お金を貸した時、何か様子がおかしかった事はなかったですか?」ヤマさんは工員に尋ねた。
「いやぁ～…4、5日したら金が入るアテがあるって言うから、貸したんですけどね…それっきりナシのつぶてで」
「そうですか～…何処か弦巻さんが行きそうな場所を知りませんかね?」
「う～ん…駅前のGパチンコか、飲み屋街のスナックFかな～」
「パチンコ屋とスナックね…いや、どうもご協力ありがとうございました」
　主任刑事が工員に礼を言うと、社長は、工員に仕事に戻るように手で合図をした。
「刑事さん、あいつに会ったら言っといて下さい。金返せって」
　そう言いながら工員が工場に戻って行くと、社長がヤマさんに尋ねて来た。
「何か弦巻が揉め事でも起こしたんですか?刑事さん」
「いや、まだ捜査中なので詳しい事は言えませんが、何かの事件に関っているかも知れませんね～」
「そうですか～…それじゃ、弦巻が顔を出したらすぐにご連絡差し上げますよ」

「ありがとうございます。どうも、お忙しい所をお邪魔いたしました」

ヤマさんは社長にそう言って一礼し、町工場の庭先から出て行った。

～続く～

やさしい刑事　第３話　「目撃者」（３）

それから一週間が過ぎたが、刑事たちは老婆殺しの容疑者と思しき、マルヒの足取りを掴む事ができないでいた。

ヤマさんだけでなく、弦巻の立ち寄り先に聞き込みに行った、他の刑事たちからの報告も芳しいものではなかった。

「マルヒの住んでいたアパートの大家がカンカンになってましたよ～…もう三か月も家賃を滞納してるって」

「スナックＦの方にもだいぶん未収があるようですね～…ママさんがブウブゥ言ってました」

「パチンコ屋の従業員も、ここ一週間くらいマルヒの顔を見てないそうですね」

「実家の方にも立ち寄った形跡はありません。もう何年も帰ってないそうです」

そうしてさらに一カ月が経ち、その間、老婆殺し事件の担当刑事たちは、足を棒にして甥の行方を捜し回った。

しかし、どこをどう探しても、事件のマルヒと見られる弦巻の足取りはまったく掴めなかった。

まるで、この世から煙の如く消え失せてしまったのか?…と思われるほど何の痕跡も残っていなかったのだ。

容疑者がほぼ特定できているにも関らず「老婆絞殺殺人事件」は、完全に暗礁に乗り上げてしまった。

とうとうヤマさんも捜査官たちも、このヤマはオミヤ（迷宮入り）になるのか?と諦め掛けていたその矢先。

突然、老婆殺しの事件現場付近をパトロールしていた巡査から、捜査班の元へ連絡が入った。

ヤマさんは、取るものも取り合えずパトカーに乗って、平野刑事と連絡のあった現場に駆けつけた。

「ご苦労様です。刑事さん」巡査が敬礼をしながらヤマさんたちを出迎えた。

「どうしたんだ?何か新しい手掛かりでも出て来たのか?」ヤマさんは巡査にそう尋ねた。

「いや～…それがですね。蔦矢さんの娘さんが『妙な異臭がする』って言うんで、母親が電話して来たんですがね」

「妙な異臭って…どこからだ?」

「はい。この家の壁と、隣の家の壁の間の隙間からなんですがね」

そう言いながら巡査が指差したのは、蔦矢家と老婆殺しのあった家の間にある７０ｃｍほどの狭い隙間だった。

盲目のバイオリン少女の弓子ちゃんと母親も、心配そうな顔をしながら現場にやってきていた。

「少し前からね…バイオリンの練習にベランダに出たら、何かが腐ってるみたいな匂いがするんです」弓子ちゃんが言った。

「弓子は目は見えないんですけどね、鼻は人一倍効くんですよ」母親がそう付け足した。

「どうも奥の方に何かが引っ掛かってるみたいなんですが、蔓が生い茂っててよく見えないんですよ」巡査が言った。

「う～ん…確かに狭くって暗い場所だし、中がほとんど見えんな～」ヤマさんは壁の隙間に顔を突っ込んで言った。

「事件が発生した場所だけに一応報告を入れといた方がよろしいかと思って、ご連絡を差し上げた次第です」

「いや、ありがとう。確かに何かが腐ったような匂いがするな～…おい、平野刑事。投光器を出してきてくれ」

「了解しました。ヤマさん」

平野刑事がパトカーのトランクから出してきた投光器が、家と家の間の隙間を照らし

出した。
びっしりと蔓の生い茂った隙間の奥の方には、蔓に巻きつかれた何かの塊が見えた。
何を思ったのかヤマさんは、着ている服が汚れるのも破れるのも構わず、蔓をかき分けながら壁の隙間に入って行った。
そうして、異様な腐敗臭の下へ向かって進んで行って、投光器に照らし出されている塊を見上げた。
そこには、身体中を蔓に巻かれたまま、壁にぶら下がって死んでいる男の腐乱した死体があった。
「平野刑事。すぐに鑑識を呼べっ！」ヤマさんは隙間の中から、外にいる平野刑事に言った。
「了解しました。ヤマさん」平野刑事は、すぐにパトカーの警察無線で警察署に連絡を入れた。
だが、鑑識の到着を待つまでもなく、ヤマさんにはその腐乱死体が誰なのか？どうしてそうなったのか？すでに読めていた。
いつもの如く、老婆の所へ金の無心にやって来た甥は、堪りかねた老婆に素行の悪さをなじられたに違いない。
カッ！となった甥は老婆の首を絞めて殺してしまった。そして、ふと窓の外を見ると

隣のベランダに人影が見えた。
「しまった！見られた」あわてた甥は外に飛び出して家と家の隙間に入り、生い茂っている蔓を伝って壁をよじ登ろうとした。
ベランダにいた少女が盲目だとは知らない甥は、殺しを目撃されたと思い込み、急いで少女の口を封じようと考えたのだろう。
だが、少女を狙う事ばかりに焦っていた甥は、自分の足元に、意外な別の目撃者がいた事をまったく知らなかったのだ。
それは、陽の当らぬ所で生まれ育って、夜毎、盲目の少女が弾くバイオリンの音に淋しい心を癒されていた壁の蔓だった。
おそらくは、一瞬の出来事だったのだろう。
一部始終を見ていた蔓は、少女を殺そうとする甥の企みに感づき、彼女を守るために壁をよじ登って来た甥に襲い掛かった。
抵抗する暇も無く、八方から絡み付く蔓に身体中をがんじ搦めにされて首を締められた甥は、声も出せずに死んだに違いない。
どんな生き物にも魂はある『壁に耳アリ、障子に目アリ』と昔の人も言った…悪い事はできないものだ。
こうして老婆殺し事件は解決したが、なぜ犯人の甥があんな場所で無残な死を遂げた

のか?それは誰にも分からなかった。
ただ、ヤマさんだけが知っていた…盲目のバイオリン少女と、日陰に生きる蔓との間に、秘められた心の交流があった事を。
それからしばらくが過ぎて、警察署で新聞を見ていたヤマさんの目は、とある記事に止まった。
そこには、あの盲目の少女が『全国バイオリン・コンクール』で優勝したと言う記事が、少女の写真入りで載っていた。
ヤマさんはすぐにその新聞を携えて、蔦矢家の狭くて暗い壁にへばり付いて生きている蔓の所へ行った。
そうして、新聞を壁の隙間にかざして見せながら、蔓に話し掛けるようにこう言った。
「お前が命を救った盲目のバイオリン少女が、コンクールで優勝したよ。よかったな～…これからも見守ってやってくれよな」
それが刑事にできる　せめてもの『やさしさ』だった
春のそよ風が、狭い壁の隙間を通り抜けて蔓がザワザワと揺れ動いた。
ヤマさんには、その蔓のざわめきが「わざわざ知らせに来てくれてありがとう」と言う声に聞こえた。
やさしい刑事　第3話　「目撃者」（完）

やさしい刑事　第４話　「母地蔵」（１）

それはひょんな出来事から始まった事件だった

歓楽街のはずれにある夜の女たちが住まうマンションで、一人の中国人女性が、隣室に助けを求めて転がり込んだ。

ひどく下半身から下血していて、すぐさま救急車で病院に運ばれたが、手当ての甲斐もなくそのまま息を引き取った。

死亡原因は、出産後の出血によるものと診断されたが、肝心の産んだはずの赤ん坊が何処にも見当たらかったのだった。

「助けてっ！…って来た時はびっくりしたわよ。だってネグリ（ジェ）の下が血で真っ赤っ赤で…」隣室のホステスは言った。

「どうしてそんなになるまで放っといたんでしょかねぇ～…一人暮らしだったんですか？」ヤマさんは尋ねた。

「いいぇ、男が出入りしてたわ…って言うか、同棲してたのかな？背の高いハンサムない い男だったわよ～」

「ふ～ん。同棲ねぇ…で、今その男は？」

「そうねぇ…そう言えば、あの子が病院に担ぎ込まれるちょっと前から見てないわね～」
「もしや、隣から赤ん坊の泣き声とかは聞こえませんでしたか？」
「あぁ、そう言えば二、三日前に赤ちゃんの泣き声がしてたような気がするわ」
「そうですか、やはり…で、その同棲していた男はどこに行ったか知りませんかね～？」
「分かんないわよ。人の彼氏の事なんか…あぁ、あの子Ｍって言うバーで働いてたから、ママさんなら知ってるかも？」
「分かりました。どうもご協力ありがとうございました」ヤマさんは、隣室のホステスに礼を言って立ち去った。
　聞き込みを終えたヤマさんが出て来たマンションの隣には、更地になっている空き地が広がっていた。
　どうやら子供たちの遊び場になっているらしく、空き地の中では何人かの子供たちがたむろして遊びに興じていた。
　ちょうどその入り口の脇に、むき出しのままの小さな地蔵尊が安置してあり、一人の老婆が周りの草をむしっていた。
（信心深いこった…俺みたいな無信心なヤツもいると言うのにな～）
　ヤマさんは苦笑いしながら、地蔵尊の側を通って空き地の前に停めておいた車に乗り込んだ。

　それからヤマさんは、病院で亡くなった中国人ホステスが働いていたバーに行った。
「シュウちゃん。いい子だったのにねぇ～…まさかあんな死に方をするとは」バーＭのママさんはそう言った。
「付き合っていた男がいたそうですね…何でも同棲してたとか？」ヤマさんはママに尋ねた。
「あぁ、あいつねぇ～…女の稼ぎをアテにするような男なんかやめなさい！ってシュウちゃんには言ったのよ」
「その男ってのはシュウちゃんのヒモだったんですか？…マルジー（ヤクザ）だったとか？ベントウ（前科）持ちだったとか？」
「いや～…そんな根性のある男じゃないわよ。ただのハズレモンよ。元タレントだったとか言ってたけどね」
「ふ～ん…いつ頃からシュウちゃんと付き合い出したのかは分かりませんかね～？」
「一年くらい前にお店に来た時からかしら…そう言えば、半年くらい前からシュウちゃんお腹が膨らんでたわね。目立たないようにドレスで隠してたけど」
「やっぱり妊娠してたんですね。その男の子供を」
「三ヶ月ほど前に、ビザが切れるからいったん取り直しに中国に帰るって言ってたけど…あれ、嘘だったのかしら？」

「そりゃぁ、きっと子供を産むためについた嘘ですよ」
「じゃぁ、やっぱり産んだんだ！…あんなしょ～もない男の子供を」
「多分一人で産んだんだと思います。今わの際まで「ウァウァ、ウァウァ（赤ちゃん）」とうなされてたらしいですから」
「そうだったの～…可哀そうなシュウちゃん」
「ところがですね～…その産んだはずの赤ん坊がどこにも見当たらないんですよ」
「まさかあの男が？…いやいや、あいつは赤ん坊を引き取って育てるようなタマじゃないわね」
「でも、手掛かりはその男しか無いんでねぇ～…男について知ってる限りの事を話していただけませんか？」
「いいわよ。私の知ってる事で役に立つならいくらでも」
そうしてヤマさんは、バーMのママから同棲していた相手の男に関する情報を聞き出し、写真までも手に入れた。
ヤマさんが『バーM』のママから入手した情報を元に、男の身元を洗い出した警察は任意出頭を求めた。
だが、ふて腐れた顔をして警察に出頭してきた男は「女とは別れた」「赤ん坊の事は知らない」とシラを切り通した。

確かに、シュウちゃんの治療をした病院の医師からは、死因は出産後の失血によるものと言う死亡診断が出ていた。
それに誰一人、肝心の産まれた赤ん坊を見た者もいない上、何一つ男が関っていると言う証拠はなかった。
ヤマさんは男の聞き取り捜査に全力を尽くしたが、しょせん参考人としての事情聴取には限界があった。
はぐらかされて肩を落とすヤマさんを尻目に、男は勝ち誇ったように肩をいからせて取調室を出て行った。
～続く～

やさしい刑事　第４話　「母地蔵」（２）

　ヤマさんは、再び事件を検証しようと死んだ中国人ホステスが住んでいたマンションにやって来た。
　側の空き地にある地蔵尊の前では、あの日見掛けた老婆が腰を屈めて草むしりをしていた。
「お婆ちゃん、精が出るねぇ～」ヤマさんはそう声を掛けた。
「あぁ、若いモンが誰も世話せんからのぅ～」老婆は、ヤマさんを見上げながらそう言った。
「ここは、もう少ししたら保育園が建つんだろ…そうしたら、お地蔵さんも引越しになるんじゃないのか？」
「いんや、引越しなんぞせんよ。この地蔵様はの…子供に縁ゆかりのある地蔵じゃからのぅ～」
「へぇ～…そりゃまたどうして？」
「小さい頃、わしの母親から聞いた話じゃがの…戦時中にこの街に大空襲があったそうな」

「うん、俺も聞いた事があるよ…何でも、街中が辺り一面焼け野原になったってなぁ～」
「その時の…空襲から逃れようとした一人の母親が、幼いわが子にはぐれてしまったそうじゃ」
「空襲の最中に子供にはぐれたのか～…そりゃあ、えらい事になってしまったもんだな～」
「その母御はの…爆弾の降る火の海の中を、死に物狂いでわが子を探して走り回り、深い火傷を負ってここまで来て、とうとう倒れて亡くなってしまったそうじゃ」
「なるほど…それでその母親を供養するために地蔵さんを作ったのか～」
「まっ、わが子を思う母親の気持ちなんぞ、男にゃ分からんじゃろうがの」
「いや、何と無く分かるよ…俺も同じような思いをした事があるからな」
「そうかい…それじゃぁ、せいぜい母親孝行するこったな」
お婆さんにそう言われて、ヤマさんは何となく後ろめたい気持ちになった。
ヤマさんは、マンションの大家から鍵を借りて、死んだ中国人ホステスが住んでいた部屋に入った。
部屋の中は、もうすっかりリフォームされていて、壁紙も血が点々と付いていた畳も取り替えられていた。
（きっと、シュウちゃんはこの部屋で誰の助けもなしに、たった一人で赤ん坊を産んだの

だろう）

ヤマさんは新しくなった部屋に一人佇んで、その時に起こったであろう出来事に思いを巡らせた。

（確かに、ここに産まれたばかりの赤ん坊と母親がいたはずだ…でも、その赤ん坊はどこに消えたのか？）

異国の地で、誰の助けもなく一人で赤ん坊を産むのは、きっと大変だったに違いない。

なぜ、そうまでして産もうとしたのだろうか？…妊娠した事に気づいた時に、堕ろす事もできただろうに。

女はわが身の危険を冒してまで、それほどまでに、自分のお腹に宿った赤ん坊を愛おしく思うものなのだろうか？

シュウちゃんは、結果的に…おそらく、相手の男が連れ去ったであろうわが子を思い続けながら命を落としてしまった。

わが子を思う母親の深い愛情を考えると、ヤマさんは何だかいたたまれない気持ちになってきた。

（証拠さえ見つかれば何とかなる…今となっては遅いが、亡くなったシュウちゃんのためにも必ず仇を取ってやる）

部屋の壁をじ～っと見つめながら、ヤマさんはそう自分の心に誓った。

ヤマさんが、事件があった部屋の検証を終えてマンションを出た頃には、すでに日は西に傾き始めていた。

むき出しのお地蔵さんの前で草むしりをしていた老婆は、どうやら帰り支度に取り掛かっている様子だった。

「やぁ、お婆さん…もう終ったのかい？」ヤマさんは、そう言って老婆に声を掛けた。

「あぁ…腰が痛いよ。歳は取りたくないもんだねぇ～」老婆は、よいしょとばかり荷物を持って立ち上がった。

ふと見ると、子供たちが遊び終えて帰った空き地の片隅に、大きな犬が寝そべっているのが見えた。

「おぉっ！あそこに大きな犬が寝ているよ…ありゃぁ、レトリーバーかなぁ～？」

「寝てるんじゃ～ないよ。子供にお乳をやってるんだよ」

「へぇ～…どうして分かる？」

「ほら、子供をかばうように体を丸めて、時折、舌でペロペロ舐めながら子供をあやしてるだろう」

「そうかなぁ～…に、しては肝心の子犬の姿が見えんがな～？」

「そんな事ぁ～知らないよ…ともかく、子供にお乳をやる仕草にゃあ違いない。女なら誰でも分かる」

「女ならねぇ～…そんなもんか？」
「あぁ、そうだ…だから男は鈍いってんだよっ！」
老婆に叱られながら、ヤマさんは寝そべっている犬を見たが、側に子犬の姿はまったく見あたらなかった。
しかし、ヤマさんの心の中には、何かしら不思議なものが湧き上がってきた。
～続く～

やさしい刑事　第４話　「母地蔵」（３）

警察署に帰ったヤマさんは、さっそく平野刑事に声を掛けた。
「おい、平野刑事。二、三人警官を呼んできてシャベルを用意させろ。お前さんもついて来い」
そう言うとシャベルを手にした警官を集め、全員でパトカーに乗ってさっきの空き地に取って返した。
（あの犬が寝ていたのは、確かこの辺りだったよなぁ～）主任刑事は場所を確認した。
「ヤマさ～ん。何するんですか～？…シャベルなんか担いできて」平野刑事が怪訝な顔をして尋ねてきた。
「花さかじいさんをやるんだよ。宝物がザックザック出てくるかも知れんぞ～」ヤマさんはいたずらっぽく笑った。
「はぁ～？…いくら何でも、こんな所に宝物が埋まってる訳ないでしょう」
「いいからブツブツ言ってないで、この辺りを掘ってみろ」
平野刑事と警官たちは、ヤマさんが指差した辺りをシャベルで掘り返した。
出て来たのは、生後間も無い赤ん坊の遺体だった。

行き付けの雀荘から出て来た男に、平野刑事は逮捕状を突きつけた。
それを見るなり、男は懐からナイフを取り出してチラつかせながら、あわてて逃げ出そうとした。
「この野郎っ!こんな所でマッポ（警官）なんぞに捕まってたまるか～」男は逃げながらわめいた。
平野刑事と警官は、怯まずに逃げる男に跳び掛かった。男はナイフを振り回して激しく抵抗した。
「やれっ!平野刑事。ホシの腕の一本や二本へし折ったって構わん!」いつもは温厚なヤマさんが激高していた。
女を食いものにして哀れにも死なせた挙句、産まれたばかりの幼い命を奪った男を許せなかったのだ。
男は身体中傷だらけになるまで抵抗したが、とうとう、平野刑事にナイフを取り上げられて押さえ込まれた。
「くっそ～っ!こんな所で地獄のイヌに捕まるとはな～」捕まった男は、悔しまぎれに捨てぜりふを吐いた。
「お前の本当の地獄はこれからだ!覚悟しておけっ!」とヤマさんは男を一喝した。
ガチャリッ!と男の手に手錠がはめられた。

男を逮捕して留置所に入れてからデカ部屋に帰って来たヤマさんは、平野刑事に言った。

「なぁ…平野刑事。お前さんとこの実家って、工務店だったよな～」

「まぁ、田舎の工務店ですけどね…それがどうかしましたか？」

「あぁ、犬小屋を一つ作って欲しいんだが」

「えぇっ!?ヤマさん…とうとう一人暮らしが寂しくなって、犬でも飼うんですか？」

「馬鹿言えっ！イヌが犬を飼ってどうすんだよ」

「あれぇ、それ自虐ネタですか～？…でもまぁ、これでも高校の頃オヤジんとこでバイトしてましたから任せて下さい」

「うん、頼むわ。材料費は俺が払うから…でも工賃は払わんぞ」

「いいですよ～…いつもお世話になってる事ですし」

それから数日後、ヤマさんは平野刑事と二人で、出来上がった犬小屋を車に積んであの空き地に向かった。

空き地の地蔵尊の前では、いつものお婆さんがむき出しになっているお地蔵さんの世話をしていた。

「やぁ、お婆さん。お地蔵さんの祠を作って来たよ…犬小屋だけどな」ヤマさんは、お婆さんに言った。

「なぁに…お地蔵さんが雨露しのげりゃ、犬小屋でも何でもいいよ。それに犬は母性が強いって言うからお似合いだわさ」

そうして、ヤマさんと平野刑事はお婆さんと一緒にお地蔵さんを掃き清めて、犬小屋の中に安置した。

それが刑事にできる　せめてもの『やさしさ』だった。

一仕事終えたヤマさんは、額の汗を拭いながら神妙な顔で平野刑事に言った。

「なぁ…たった10カ月しかお腹の中にいなかったのに、どうして子供は一生オフクロとへその緒が切れねぇんだろうな～」

「どうしたんですか?ヤマさん…急にシンミリして」

「いや、何でもないよ。何でも…」

あの時、男に殺されて埋められた赤ん坊にお乳を与えていた犬は、空襲でわが子とはぐれて焼け死に、地蔵になった母親なのか?

それとも、男に赤ん坊を連れ去られて、病院で今わの際までわが子を思い続けながら死んだシュウちゃんの化身だったのか?

さすがのヤマさんにも、そこまでは分からなかった。

思えば、わが子を思う母親の愛情は、どこまで深いものなのだろうか。

ヤマさんは日が落ちて行く西の空を見上げたながらポツリとつぶやいた。

「雪と子供は今どこに」と…

ヤマさんの妻と子供の行方が分からなくなってから、長い年月が流れていた。

やさしい刑事　第四話　「母地蔵」（完）

やさしい刑事　第５話　「人形の涙」（１）

通報を受けて駈けつけた殺人現場は凄惨の一語に尽きるものだった。
真新しいワンルーム・マンションの部屋の一角は血だらけで、周囲の壁には血が飛び散っていた。
「こりゃぁ、ひで～やっ！」中に入るなり平野刑事は言った
「あぁ、まるでハリウッド映画を見てるみたいだな～」ヤマさんもそうつぶやいた。
「こんだけメッタ突きにされてるって事は、怨恨絡みか何かですかねぇ？」
血に染まって倒れたまま死んでいるガイシャ（被害者）のマンジュウ（遺体）を検分しながら平野刑事が言った。
「有り得るなぁ…おいっ、ちょっとヤッパ（凶器）を見せてくれ」ヤマさんは鑑識捜査官に言った。
鑑識捜査官はビニール袋に入れた刃渡り１５Ｃｍほどのペティナイフを持って来た。
「握ったエンコ（指）の後が残ってるなぁ～…モン（指紋）は割れそうだな」
「はぁ…これから署に持って帰って調べます」
「うん、頼む」そう言ってヤマさんは、再びガイシャに目をやった。

ガイシャは２５才になる中堅企業の社員。首や背中を刃物で滅多突きにされて殺されていた。

無断欠勤が続いて電話も通じないのを不審に思った上司が、マンションを管理する警備会社に連絡して死体が発見された。

開かれたままのノートパソコンは血で汚れ、日本で有数のドールメーカーＹ社のホームページが開かれたままになっていた。

「これ、なんだかゾッ！としますねぇ～」

奥のベッドの横に立っている、血の付いた等身大の少女ドールを見ながら平野刑事が言った。

「おそらく、ガイシャはドールマニアだったんだろう…最近はそんな趣味の若者も多いらしいからな」

「いやぁ、自分は嫌ですね～…こんなのが部屋に置いてあったら気味が悪くて寝られませんよ」

「そうだな…俺もお前さんが人形抱っこして寝てるなんて、想像しただけでも気味が悪い」

「またぁ～…そんなにイビらないで下さいよ。ヤマさん」

「それにしても、奥のベッドまで血が飛び散っている割には部屋の中が荒らされてない

な～」
「ガイシャは、ほとんど抵抗しなかった…って事ですかね～？」
「パソコンを見ている最中に、背後から何者かに刺されたのは間違いないだろうな」
「じゃぁ、やっぱりホシ（犯人）はガイシャと親しい人物だったとみて間違いはなさそうですね」
「あぁ、マンションはオートロックだし、ガイシャ自身がホシを招き入れたとみていいだろう…ただな」
「ただ…何ですか？ヤマさん」
「パソコンの前で殺されたはずなのに、何で離れた奥のベッドにまで血痕が着いているのかが分からん」
「そうですね。ガイシャが這っていった形跡はないし、もしかしてホシがそこで着替えでもしたとか？…逃走するために」
「おぉっ！さすがに平野刑事だな…確かに血の着いた服のままだと逃走する時に人に怪しまれるからな」
「からかわないで下さいよ～…ヤマさん。でも当ってるでしょ」
「そうだな…ホシは、前もって着替えを用意してから犯行に及んだ。ガイシャを殺害した後ベッドで着替えをして、血の着いた服をカバンか何かに入れて悠々と現場から立ち

去った…そんな計画的犯行だったなら何で現場にヤッパが残ってるんだ？」

～続く～

やさしい刑事　第5話　「人形の涙」（2）

「あっ！それもそうですね～」
「第一、計画的にコロシ（殺人）をやるなら、ペティナイフより、出刃包丁か刺身包丁の方が効率的だろ」
「確かに、ヤマさんにそう言われてみればそうですよね」
「だろ…コロシのプロでもない限り、人を殺って悠々と着替える余裕のあるヤツはいないよ。何か他に理由があるはずだ」
「う～ん…じゃぁ、何でベッドに大量の血痕が着いているんでしょうね～」
「俺にも分からん…だが、そんな事を詮索するのは後だ。ホシを挙げたら分かる事だからな」
「そうですよね。まず先にホシを挙げなきゃぁ」
「よしっ！まずはガイシャの交友関係を当たるぞ。そん中に必ずホシがいるはずだからな」
「了解しました。ヤマさん…早速手配します」
「あぁ、頼んだぞ。平野刑事」

事件現場から出てゆく平野刑事を見送りながら、ヤマさんは奇妙な違和感に襲われた。

おかしい？どうもこのヤマ（事件）は変な匂いがする…何かが不自然だ。単なる密室殺人じゃなさそうな何かが。

「大人しい男でねぇ、特に面倒を起すような事もなかったし…まさか殺されるなんて」

「社内で別の誰かのトラブルに巻き込まれた…と言うような事はなかったんでしょうか？」

殺された玉下祥太の勤務先に聞き込みに行った平野刑事は、ガイシャの上司に尋ねた。

「さぁ…うちは割と自由度の高い社風で、他人の事には余り口出ししないのが原則ですから、これと言ったトラブルは聞かないんですがね」

「そう言われてみると、確かに若い社員が多いですよね」

「そうでしょ…結構人気がある職場なんですよ。若い人に…あぁ、ここが玉下が使っていたデスクです」

そう言われて平野刑事が上司に案内されたのは、いかにも若者が好みそうなスタイリッシュなパソコンデスクだった。

周りを見ると、他の社員のデスクも若者らしい飾り付けがしてあったり、趣味の品が

置かれていたりしていた。
（なるほどな～…こんな職場なら若者に人気あって当然だろうな）平野刑事はそう思った。
「一応、捜査の参考になる物品は署に持ち帰らせていただきますが…よろしいですか?」
「ええ、どうぞ」
「後、職場で玉下さんと付き合いのあった方から話を聞きたいんですが」
「はい…おい、誰か玉下の事を刑事さんに話してあげてくれんか」
　上司にそう言われた職場の社員たちは、急に全員が押し黙ってしまった。
「あ、別にみなさんを疑ってる訳じゃないですから…最近、玉下さんに変った様子はなかったか聞きたいだけで」
　空気を察した平野刑事は、あわてて言葉を付け足した。
「最近変った様子とかよりも、ず～っと普通に変ってましたよ…キモ玉は」社員の一人ががおずおずと口を開いた。
～続く～

やさしい刑事　第５話　「人形の涙」（３）

「キモ玉？…普通に変っていたとは？」
「あ、すいません。ついいつもの調子で…少しキモいヤツだったんで、みんなそう呼んでたもんですから」
「玉下さんは、みんなに嫌われていたんですか？」
「いや、嫌われてた訳じゃないですけど…空気読めないっつぅ～か、何っつ～ぅか」
「そう、そう、何考えてるかさっぱり分からないようなところがあって」
　平野刑事に安心感を覚えたのか、他の社員もおいおいに話をし始めた。
「カラオケとかコンパとかに誘っても来ないんですよね…それで、いつの間にか誰も誘わなくなったんです」
「へぇ～…人付き合いが苦手だったんですかね？」
「いぇ、彼女とデートがあるからって」
「ほ～ぅ…ガールフレンドがいたんですか～」
「いゃいゃ、女にモテるようなヤツじゃなかったですよ～」
「でも、ガールフレンドがいたんでしょ？」

平野刑事と男子社員の話を聞いていた女子社員から、あざけるような含み笑いがもれた。
「それがねぇ…おい、中川。あいつの家に行った事あるのお前だけだろ」
「余計な事言うなよな～」指名された男子社員が迷惑そうな顔をした。
「いえ、余計じゃありませんよ。捜査には大事な事です…ぜひ聞かせて下さい」
「僕はフィギュアを集めるのが趣味なんですけどね。あいつがしげしげと僕のデスクを覗きに来るんで『お前も好きなのか?』って聞いたら、そうだって…で『見せてやるから家に来い』って言うんで、行ってみたんですけどね」
「ほう～…それで?」
「部屋に入ったらでっかい人形が置いてあって『僕の彼女だ』って自慢するんだけど、フィギュアって小っちゃいから可愛いんですよね」
「確かに、秋葉原辺りで見掛けるアニメやゲームのキャラクター人形って小さいですね」
「そうでしょ…だから、あぁ、こいつは住む世界が違うな～…ってそれっきり行きませんでした。なので、僕は事件には関りありませんから」
「いや、誰も君が事件に関ってるとは言ってないよ。ただ、玉下さんの交友関係を知りたいだけで」
「友達できるようなヤツじゃなかったですけどね～…コミュニケーション下手だったし

…浮いてたし」
「なるほど。玉下さんは人付き合いが上手ではなかったと言う事ですね」
「俺らも人付き合い上手じゃないですけどね…だから、ここは楽なんですよ。あんまし人間関係がややこしくないから」
「そうそう、自分の仕事やってりゃぁ給料出るしね」
「あぁ、それで自由な社風なんですね。よく分かりました…ご協力、どうもありがとうございました」
（自分が傷付くのが恐いから他人に深入りしない。そこそこに人付き合いをして人間関係をやり過ごす…職場の同僚が死んでも、それを他人事のように語る。それが彼らの言う自由なんだろうな～）
　若い社員たちの聞き込みを終えた平野刑事は、何だか少し寂しい思いがした。
～続く～

やさしい刑事　第５話　「人形の涙」（４）

「ええっ!?…ニュースでやっていた事件の被害者ってうちの顧客だったんですか～」
「そうです…それで捜査にご協力いただきたいと思いましてね」
ヤマさんに警察手帳を見せられたドールメーカーＹ社の営業部長は驚いた顔で言った。
「少々お待ち下さい。刑事さん…今カスタマーサービスの責任者を呼びますから」
そう言って営業部長が呼んできたのは、プログラマー風の若い男だった。
男に案内されてヤマさんが入った部屋には、多数のパソコンが設置されていてサービス係の女子社員が仕事をしていた。
男は自分の席に着くと、手際よくパソコンを操作して顧客データを検索し始めた。
「玉下祥太さんですね。あぁ…出ました。どうです。住所とか年齢は一致してますか？」
男は画面をのぞき込んだヤマさんにそう尋ねた。
「ええ、本人で間違いないですね」
「データを見ると、随分頻繁に購入してますよね」

「ほう～…若いのによく金が続いたもんだな～」
「それも衣装やパーツだけでなく、本体もほぼ半年おきに買い換えてます。こりゃぁ珍しいお客さんだな～」
　男はパソコンの画面をスクロールしながら、ヤマさんに購入記録を示してみせた。
「この手のドールって、結構お高いんでしょ?」
「まぁ、付属品を付けると２０万くらいになります。なので頻繁に買い換えるお客さんは滅多にいませんから、うちにとっては良い
　お客さんだったと思います」
「代金の支払いに問題はなかったですか?高価な物を頻繁に買い換えると、どうしても金に無理が出てくると思うんですが」
「いえ、うちは通販限定ですから、代金が振り込まれなければ品物は発送しません…それに」
「それに…どうしました?」
「データを見る限り、ドール本体の購入はボーナスシーズンになってますね」
「ボーナスを全部はたいてドールを買い換えた…と言う事でしょうか?」
「多分そうでしょう…でも、みんなそうじゃないですか?スマホを新型に買い換えたり、新作ゲームを買ったり…僕もボーナスをだいぶんパソコンにはたいてますけどね」

「欲しい物を我慢して、将来の結婚に備えて貯金したりはしないんですか？」
「あはは…できるかどうか分かんないですしね。それに楽しめる時に自由に楽しんどかなきゃ損でしょ」
「まぁ、そう言われてみりゃぁそうだが」
（結婚よりも自分の人生を楽しむ方が大事か～…今時の気風と言えばそうかも知れない。どうりで子供が少なくなる訳だな。
まぁ、俺の考え方の方が時代遅れなんだろうな～）
若いカスタマーサービス主任と話したヤマさんは、柄にもなく世代のギャップを感じてしまった。
～続く～

やさしい刑事　第５話　「人形の涙」（５）

「どうだった平野刑事…何かホシに繋がるような手掛かりは掴めたか？」
　一足先に警察署に戻っていたヤマさんは、聞き込みを終えて帰ってきた平野刑事に尋ねた。
「それがね～…勤務先だった職場で聞いた限りでは、ガイシャにはこれと言った交友関係がないんですよ」
「ガイシャは孤立していたと言う事かな？…なら、孤立した原因がコロシの動機に繋がるんじゃないか」
「いや、それが全員が孤立してるみたいなんです。他人の事には関らないと言うか…それが普通みたいな感じで」
「はぁっ？他人との付き合いを避けて孤立するのが普通って…どう言う意味だ？」
「つまりですね。周りがみんなそうならそれが普通なんですよ…だから、ガイシャも少し変ってたけど普通だったと」
「ふ～ん…おかしな職場だな～」
「でも、働きやすいって言ってましたよ。人間関係にわずらわされずに自由に働けるっ

て」
「そう言やぁ、俺が聞き込みに行ったY社の若いサービス主任も言ってたなぁ…結婚するよりも、自由に人生を楽しみたいって」
「そんなもんじゃないんですか…今時の子って」
「お前さんだって、今時の子じゃぁねぇか」
「まぁ、そう言われりゃ～そうですけど」
「時代が変わりゃぁ、おかしな事でも普通になっていくんだな。今回のガイシャの趣味だって、昔ほど変な目で見られる訳じゃないし…何が普通で、何が普通でないのか？俺にはさっぱり分からん」
「今時が普通なら普通じゃないんですか？そんな事言ってると、ヤマさんも時代遅れのオッサンになりますよ～」
　いつもやられている平野刑事は、この時とばかりにヤマさんをからかった。
「バカ言えっ！まだまだお前にゃ負けんぞ…とは言っても、お前らの方が多数派になりゃぁ俺の方が普通じゃなくなるんだよな」
　ヤマさんと平野刑事がそんな話をしているところへ、鑑識捜査官がやってきた。
「おぉ、どうだった…ホシのモンは出たか？」
「それがねぇ…エンコの跡はあるのにガイシャのモン以外は出てこないんですよ～」

「う～ん…となると、手袋をしてヤッパを握ったって事か～」
「ほらね…やっぱり僕の推理通り計画的な犯行臭いでしょ」
　得意気に言う平野刑事をよそに、ヤマさんは憂かない顔をしていた。
　ヤマさんは、再び事件のあったワンルームマンションを訪れた。
（何か肝心な事を見落としているのではないか？）あの時、直感的に感じた違和感が頭の中を横切った。
（ガイシャはここに座ってパソコンを開き、Ｙ社のホームページを見ていた）デスクの前に立ったヤマさんは想像を巡らせた。
（Ｙ社のサービス主任の言う通りなら、ガイシャは次のボーナスシーズンに買い換えるドールを物色してしていたんだろうな。
　そこを後ろから近付いて来たホシに刺された…となると、やはり、ガイシャとホシは親しい間柄だったと言う事になるだろう。
　平野刑事の推理だと、最初っから殺意を抱いていたホシは、あらかじめ手袋を用意して指紋を消しておいてヤッパを振るった。
　だが、実際にガイシャをメッタ突きにした後、動揺してヤッパをその場に放り出してしまったのかも知れない）
　～続く～

やさしい刑事　第5話　「人形の涙」（6）

ヤマさんは、殺害現場から離れた奥のベッドの側まで行ってさらに考えを巡らせた。
（それからホシは、ベッドに血の着いた服を脱ぎ捨て、顔の血を拭き取ってから持ってきた服に着替えて部屋を出て行ったのか…
ベッドにたくさんの血痕が着いていたのは、本当にそう言う理由からだったのだろうか？）
ヤマさんには、どうしても平野刑事の言う事件の経緯に合点がいかなかった。何かが違っているような気がした。
「なぁ…お嬢ちゃんは一部始終を見ていたんだから知ってるよな～」
困り果てたヤマさんは、ベッドの側に立て掛けてある血に染まった人形を見て苦笑いした。
そうして、人形を背に床に座って、もう一度ガイシャが倒れていた場所に目を凝らした。
その途端にヤマさんは、首筋に落ちてきたひやりとした何かを感じた。
驚いて振り向いたヤマさんは、事件のすべてのいきさつを理解した。

「こりゃぁうかつだった…道理でモンが出ない訳だ。お嬢ちゃんの血痕にもっと早く気付くべきだったな～」

ヤマさんはゆっくりと立ち上がると、ポケットからハンカチを取り出した

「愛していたんだよな。ヤツを…どんなにひどい浮気男でも、いなくなりゃぁ寂しいもんさ」

ヤマさんはそう言いながら、血に汚れた人形の涙をそっとハンカチで拭ってやった。

それが刑事にできる　せめてもの『やさしさ』だった。

きっとこの子は、返り血を浴びた後に、いつも男と一緒にいたベッドでさめざめと泣いたのだろう。

人付き合いを煩わしいと言って避けている今時の男の子に、この子の気持ちは分からなかったのかな？

きっとこの子は愛しい男の思い出を抱いたまま、焼却炉で焼き捨てられてしまうのだろう。

そう考えると、ヤマさんには自分が殺した愛する男を思って泣いた少女人形が不憫にさえ思えた。

「何か分かりましたか？ヤマさん」

警察署に帰ってきたヤマさんに平野刑事が声を掛けた。

「いんや、何にも…もしかしたら、お前さんの推理通りかも知れんな。平野刑事」
「やっぱりそうでしょ…じゃぁ、計画的殺人って事でもう一度事件を洗い直してみますか？」
「あぁ…ところでお前さん。今付き合っている女の子はいるか？」
「何ですか？やぶからぼうに…前に付き合ってた子に振られてから、彼女いない歴５年ですよ～」
「刑事なんて、ただでさえ危ない仕事で安月給ときてる…彼女ができたら大事にしろよ。俺みたいにならん内にな」
「はぁっ？」平野刑事は呆気に取られたような顔をしていた。
もしかしたら、俺が見たのは今の時代に生きる子たちの孤独の影法師だったのかも知れない。
人はみんな影法師を背負って生きている…時代が移り変って普通が普通じゃなくなっても人の思いは変らんもんだ
思えばあれから随分と時が経った…雪は今どこにいるんだろう。生きているのか？もう死んでしまったのか？
ヤマさんは自分の影法師をじっと見つめた。
やさしい刑事　第５話　「人形の涙」（完）